

分類, Stage 分類, 組織学的分化度, 癌浸潤様式 (Y-K), 化学療法, 一次治療, 頸部リンパ節転移の状況, 遠隔転移部位, 遠隔転移確認時期などである. 結果: 癌浸潤様式が4C, 4D型などのびまん性に浸潤する症例や, 頸部リンパ節転移を生じた症例が多く, 肺への転移が半年程度で認められた. 今後, 分子遺伝学的解析も含めて検討する必要があると思われた.

2 口腔扁平上皮癌における両側頸部郭清術施行例の臨床的検討

小野由起子・芳澤 享子 (新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻顎顔面
高田 真仁・野村 一郎 (再建外科学講座組織再建口腔外科)
小林 正治・鈴木 晋
新垣 晋

1985年から2000年までに頸部郭清術を施行した口腔扁平上皮癌症例78例のうち両側郭清術施行例19例(24.4%)について臨床的検討を行った. 症例は男性15名, 女性4名, 42~77(平均60.4)歳であった. 原発部位は舌6例, 口底5例, 下顎歯肉5例, 上顎歯肉3例で, T分類ではT2:6例, T3:3例, T4:10例であった. 施行時期は同時が8例, 異時が11例で, 術式は同時例では根治的郭清(RND)+機能的郭清(FND)3例, RND+部分的郭清(PND)3例, PND+PND2例, 異時例ではRND+RND5例, RND+FND5例, RND+PND1例であった. 異時例では2回目の郭清術までの期間は6ヶ月以内が8例, 1年以上が3例であり, また2段階で郭清を施行した症例は3例, 後発転移例は8例であった. 病理組織学的に両側に転移が認められた症例は11例, 片側は4例, 両側とも転移が認められなかった症例は4例であった.

3 顎・口腔領域における非ホジキンリンパ腫の初発臨床像および病理組織学的検討

高田 正典・田中 彰 (日本歯科大学
岡田 康男・小野 徹 (新潟歯学部口腔外
金子 恭士・又賀 泉 (科学第2
石井 馨・片桐 正隆 (同 病理)
柴崎 浩一 (同
張 高明 (新潟県立がんセンター新潟病院内科)

顎・口腔領域に初発する非ホジキンリンパ腫(NHL)は, 自覚症状に乏しい割に急速に増大し, 臨床所見も多岐にわたることが特徴である. 上皮系悪性腫瘍に比して痛みに乏しく, 広範囲なびまん性の腫脹を呈することが多く, 歯性炎症や歯周組織炎などの臨床診断にて処置後, 紹介来院するケースも少なくなく, 受診するまでに長期間を要することもある. また初診時の臨床所見, 諸検査から診断, 治療に至る経緯が, 本症の予後を大きく左右することが考えられる.

今回1990年以降に経験したNHL11例について, その初発臨床像および病理組織学的検討を行ったので報告する. 11例の概要は, LSG分類で検討するとDiffuse large cell typeが9例で最も多く, 原発部位別頻度は上顎歯肉, 下顎歯肉, 頸部, 上顎洞, 上顎, 頬部の順であった.

4 マイクロアレイを用いた遺伝子発現解析に基づく口腔扁平上皮癌の病態と予後因子に関する検討

永田 昌毅・藤田 一 (新潟大学大学院
星名 秀行・井上 達夫 (医歯学総合研究科
関 雪絵・高木 律男 (顎顔面口腔外科)
新垣 晋 (同
依田 浩子・朔 敬 (同 口腔病理)
大西 真・大山登喜男 (長岡赤十字病院
歯科口腔外科)

口腔扁平上皮癌(OSCC)の病態把握を目的に, cDNAマイクロアレイを用いた遺伝子発現解析を行った. 対象と方法: 新潟大学歯学部附属病院ならびに長岡赤十字病院で治療を行ったOSCCの切除組織, および対照として正常口腔粘膜のmRNAを検体とした. これらについて, 癌関連遺